

「早苗たちよ！ 豊かな実りを！」 —佐保台小5年生田植え体験—

鈴木 末一

今年も里山に未来っ子の元気な声がこだました。2023年6月8日、佐保台小学校5年生(24名)の水稻栽培体験学習のスタートとしての田植え、15年目を迎え、大きな節目となった。

思えば「三井物産環境基金・3カ年計画」の中に「ビオトープ・水田の復活」を盛り込んだことが出発点だった。2008年の幹事会で協議を積み重ねた結果、水田復活推進事業が了解され、詳細は「ならやま世話人会」に委託された。

「ここに水田があった」「ここは畑で年間を通して立派な旬菜が採れていた」など、半世紀以上も前のことを思い浮かべ、「水田は、環境教育の場で、自然と親しむ入り口」「里山林は子孫から借りている自然」など、入会まもない新参加者が、昔のならやま里山林の情景を発信し続けた。早速復活作業に取り組み、4月末には水田の形が整った。以来15年間で約300人の5年生の水稻栽培体験学習の場となってきた。

さて節目の田植え。例年はない早い梅雨入りで当日の天候が気がかりだったが、幸い降水確率0%、田植え日和となった。

千載会長が、「今回で15回、これまであなたたちの先輩約300人がこの貴重な体験をしています。今日植えた苗が大きく育って10月には稲刈りができるように私たちの仲間がお世話します。時には植えた稲がどんなに育っているか見に来ていただいて、いつか給食で食べることを楽しみに、大きく育つのを見守ってください」と挨拶。それを受けて男女一人ずつのクラス代表が「初めて体験する者ばかりですので、一生懸命取り組みます。よろしくお願いします」と決意のほどを表明してくれた。

田植えの要領を実演を交えて教わった後、一歩一歩水田の中へ。「キャーッ」「ネチャネチャ

やー」「ヒャーッ」素足で感じる泥の感触が、叫び声になって里山に響いた。数分後、スタートラインに整列し、誘導指揮担当者の号令と見守り隊の指導のもと、田植えがスタート。「田植えの歌」が流れる中、5筋目ぐらいから要領良く進むようになった。例年、少なくとも一人はバランスを崩して水田の中へ転倒、下半身を泥まみれにするのに、今年は全くなく、ひと安心。



予定の時間よりも20分ほど早く、一人当たり平均110株、会員が補助した分も併せて全体で3300株ほどの植え付けが完了した。

ある児童は、「楽しかったです！植える時に泥がネチョネチョしてたから楽しかった。みんなに美味しい米を食べてもらいたいと思いながら植えました」「いっぱいおかわりをして、お米を沢山食べたいです」と息を弾ませていた。

児童たちは手足を洗い、赤ダスキを返却してから整列。担任の先生の掛け声に合わせて、苗の成長と秋の豊かな実りへの願いを込めて、「のびろ！のびろ！大きくなのびろ！大きくなのびてお米にな～れ！」と、元気に櫛を飛ばした。

7月には生育の状況観察、そして秋になれば稲刈り、脱穀も体験し、収穫したお米を全校児童が給食で食べる予定だ。



未来っ子
(158㎡)



はぐくみ
(152㎡)

